所感

徳山の生んだ二大史家等を温ね（たず）
王政復古の史観を想う

会員　清木　素

一、徳川光圀の『大日本史』編さんの動機

光圀は一八歳の折、司馬遷『史記』の伯夷伝に触れて、その一編の物語の中に、家督を争わず譲り合った謙譲の美徳、革命の否定、史書の持つ価値について三点の真実を見出して激しく感動した。感性の窓を開いて自己の史観の樹立に確信を得た。

「大日本史叙」の中で、「先人十八歳、伯夷伝を読み蹶然として其の高義を慕うあり。巻を撫して歎じて曰く、載籍あらずんば虞夏の文、得て見るべからず、史筆に由らずんば、何を以てか後の人をして観感する所あらしめん」と。是に於て乎慨然として修史の志を立てたという。

光圀が生涯の大事業として手がけた大日本史が、我が国の史書のうち偉大なるものの一つであり、特にその史観の理念である大義名分論の後世に及ぼした影響の甚大であったことは、周知のことである。それ等の編修に参加した彰考館出仕の学者の中に徳山藩出身の吉弘元常のあったことについて、今一度見直さなければならないと思うと共に、この不朽の歴史的遺産の後を引き継いで、後小松天皇から仁孝天皇までの史実を独力編修した『野史』の著者飯田忠彦も徳山藩出身であったことを再考し、史家としての事績を温ね、幕末動乱の時代に於ける王政復古の精神的支柱の意義について新しい角度で見直してみたい。

二、徳川光圀と吉弘元常との関係

元常は、初名玄仍、通称を左助、字を子常と言い、磬斎又は菊潭と号した。その先祖は、大友家の重臣吉弘鎮乗という。

彼は永禄三年（一五六〇）大友義鎮から一字貰って鎮乗と名乗り、大友家の衰亡に逢い遂に浪人することになる。幸いにしてその子鎮元を経て鎮則に至り、徳山藩の始祖毛利就隆に医業をもって召抱えられた。

（祝髪して仙菴と改名）

元常は、その仙菴の長男として寛永二〇年（一六四三）に出生、家は小禄であって家計は非常に貧困であったが、生来聡明であり、豪気に満ち負けじ魂の持ち主であった。七歳にして文字を書き、また大学を読み一一歳には詩を作り、秀才の名をほしいままにした。そして、一七歳には大いに志を立て諸家の書物を読破して知見学識を深め、両親も彼の好学に最大の希望を託した。決意して彼は一八歳の時、饗庭東庵先生の門に入り、儒医の学を修めることになった。

「学若不成死不帰」の大決心で上洛した。元常は饗庭塾にあって旦夕を惜しんで刻苦勉励したが、一つの懐疑に陥り、医を生涯の学とするか、儒学を研究し人の道を極め、世を救済するかに迷いを感じはじめた。そして、上洛に際し、父仙菴に逢うことを勧められた藤原惺窩の子鴻儒で有名な山本泰順のことをふと思い出し、遂にその門下に入ることになった。それは、泰順の単なる儒学のみでなく、多分に国学的素養の学風に心引かれたものであった。

寛文四年（一六六四）元常は二二歳の時、奥山玄建の推薦によって徳川光圀に仕え、諸大家に伍して大日本史編修の事に従うこととなった。若輩の一書生が、大事業に参加することを考える時、いかに元常の学力が充実し優秀であったかを偲ぶことができる。

寛文七年（一六六七）一二月、禄二〇〇石を給せられ、延宝四年（一六七六）には、小納戸役を仰付けられて史館に出仕。そして、天和二年（一六八二）一〇〇石加増され三〇〇石となった。

光圀は、貞享元年（一六八四）人見伝・佐々宗淳・吉弘元常に向かって「風紀伝拠日本記・古事記・舊事紀等為文者、不須注出典、其旁采文雑説者、宜悉注其考拠書名」と典拠を明記することを命じた。これは、本朝通鑑など従前の史書に見られない大日本史の特色であって、ことごとに厳正であり、実証的であろうとした光圀の態度を明示したものであった。

貞享四年（一六八七）、吉弘元常が『大友本紀論』を書き、人見伝が『天武紀考証』を、安積覚が『帝大友紀議』を著したのも、改稿に際して、その主張を更に検討し確実なものにするためであり、光圀が真実を究明するために、繰り返しこの問題を検討していた慎重な態度と見ることができる。長年月を費やしながらも、各方面にわたって史料の採訪に努力を惜しまず、実証的態度をくずさなかったという。

元禄二年（一六八九）夏、元常は編修関係諸家と相議し『修史義例』を作成して、大日本史編修の大方針を樹立明示した。かくして元禄四年の正月迄約三か年の間総裁職として、大日本史編さんの事実上の責任者となった。辞職後は世子恭伯（吉孚）の教育係となり、これ又光圀・綱条の吉弘に対する信任の現れと見てよかろう。

『修史義例』の作成といい、紀伝編さんに尽くしたところは大きい。本紀七三巻・列伝一七〇巻の大日本史において、元常撰と確かめられるのは、

『土御門天皇』
『御醍醐天皇下』（貞享四年丁卯八月）
『列伝第一一二、足利義詮』
『後光厳院』

である。

元常は能文を以て知られ、有名な梅里先生（光圀の尊称）碑文を添削したのも元常であった。

此方下官寿蔵之上自然石ヲ建碑面ニ梅里先生墓と彫申候。就夫碑陰ニ少々我等年来之趣意ヲ刻申度候故、頃日致下書候、素文章不調法。別而見苦候へども、此趣ハ従佗難書事ニ候間、自身先下書致

候。貴殿一覧候而思ひ寄所御座候ハバ、點削所希也。是ハ萬々歳残天下ノ口碑ニ頼申事ニ候間、必々無腹藏御申聞可給候。儒仏之論此まゝ指置申度候。定而足下ノ気ニハ入申間敷と存候。後々ハ沙汰仕候而不苦候。其内ハ成程音密ニ致候間、親子兄弟へも深御慎候而可給候。頓首

十三日（元禄四年六月）　西山隠士

吉弘足下

書中には、貴殿とか可給候とかの語が使用され、二八万石の旧藩主の史臣に対する書状とは思われない。光圀との関係は、かくの如く密接であったのみならず、当時水戸へ招聘され、光圀の師と崇敬されていた有名な朱舜水とも親交深きものがあった。

朱舜水は、元常の学才を愛し「文章極佳」と言っている程であり、元常を水戸第一流の文章家と折り紙をつけてており、また、詩人としても第一流人と伝えられている。

しかるに元禄七年六月、元常に一身上大危機が起こった。同藩の士との不和がもとで、遂に非命に遭遇し死去する。時に五三歳、前途ある元常の死は残念至極と言うより外はない。

墓は、水戸市上水戸の光台寺にあり、今も元常の子孫は続いているとのことである。

『大日本史巻四本紀仁徳天皇』抜粋

七年己卯、夏四月辛未朔、天皇登台、見烟気多起、謂皇后曰、朕既富矣、復何憂乎皇后曰、今宮室朽壊、不免暴露、何謂富乎、天皇曰、天之立君、本為百姓、故君以百姓為本、古昔聖王、一人饑寒、顧之責身、百姓貧則朕貧也、百姓富則朕富也、未有百姓富而君貧者矣、

○水鏡、神皇正統記並曰、此時天皇喜而歌曰、多加岐夜珥能保利氐美禮波、計布利多豆、多美能加麻斗波、珥岐和比珥計利、按延喜中講日本紀竟宴和歌、藤原時平詠天皇、其詞與此相近、恐後人改易以為天皇御製歟、然新古今集亦收之、既膾炙於人口、姑附于此、秋八月九日丁丑為去来穂別皇子、

定壬生部。

○按本書履中紀、三十一年、立爲皇太子下註、時平年十五、崩下註、時年七十、據此則是時履中帝未生、或有謬誤、説履中紀、爲皇后定葛城部、九月、諸国請曰、課役竝免、既經三年、今百姓富饒、路不拾遺、家有餘儲、而宮殿朽壞、府庫不充、請貢税調、以修理宮室、不聽、十年壬午、冬十月、始科課役、以造宮室、於是、百姓扶老携幼、爭先来赴、運材負簀、日夜營作、未幾、宮室悉成。

たかきやに　のぼりてみれば
　　けぶりたつ
　　たみのかまどは　にぎわひにけり

は、尋常小学校国史教科書で思い出の和歌であり、平安女性が漢字を変体仮名やひらがなに変えたように、日本人の史観は漢文で書いても、その精神は我が国の独自性を失わなかったと言うことができる。所謂、儒教心酔的ではなく、日本主義的立場においての儒教採用であったと言える。

三、徳川光圀と徳山第三代藩主毛利元次

宝永七年（一七一〇）春、三代藩主元次は、『徳山雑吟』を著しており、林義端は元次を賞賛して「西山源公（光圀）之後、継其芳躅、舎侯而其誰哉」と結んでいる。

元次は紛華を好まず、ただ経史（経書・史書）を自ら娯む河間王（歴史を好み、蔵書を楽しむ）の癖があり、蔵書は三万冊あって、現在国会図書館・大学図書館に寄贈されている。また、元次自身も誌（徳山小学校蔵）の中に書淫（蔵書を楽しむ癖）という言葉を残している。

書籍（経書・史書）類を多数残した元次の本意は、七代就馴の時の藩学館鳴鳳館設立の動機となったと言っても過言ではない。

四、飯田忠彦について

飯田忠彦は字を子邦、通称を要人・刑部・左馬と改め、夷浜釣叟・環山・黙叟・野史氏等と号し、父は徳

山藩士生田十蔵、母は大家氏で、その二男として寛政一〇年一二月一八日、徳山で誕生。幼少より既に非凡の才は、群を抜いていた。

二、三歳の頃から菅公の像を好み、五、六歳の時はこれを描写し、文字を書写し、暗記力に恵まれ、武鑑（江戸時代諸大名などについて、色々な参考事項を書いたもの）を暗誦した程であった。

飯田忠彦自画像

時に、河内国の八尾に遊び、当地の郷士飯田謙介を知り、その養嗣子となり、飯田姓を名乗る。

(1) 『野史』の編修にふみ切った動機

忠彦は、八尾にいる間、余暇があれば楼居し読書に耽って降りなかったという。人呼んで二階先生と言ったと伝えられている。

当時、忠彦は史籍を愛読し、文化一二年（一八一五）歳一六の時始めて徳川光圀編さんにかかる『大日本史』を読み、本紀の神武天皇より後小松天皇迄で擱筆せられているのを見て大いに嘆息し、独力を以て光圀の偉業を継ぎたいと自力大成を企てた。

そして、以来三〇有余年国史を読み、東に走り西に赴き史料を閲読し、これを整理して『野史』編さんに人に知られない苦心精進を続けた。

(2) 『野史』の体裁・敍述の態度

『野史』は、後小松天皇より仁孝天皇に至る四二〇余年の史実を紀伝体を以て記述した二九一巻に及ぶ大著である。その体裁及び敍述法は、『大日本史』を模している。

『大日本史』は、紀伝体として本紀・列伝・志・表を完備しているが、『野史』は本紀・列伝のみである。

次に叙述の態度について、第一にできる限り史料を博採し、史実を正確に伝えようとしている。

中には、史料の選択が疎漏であるとか、俗書に拠った所が多いとか、誤のある点など指摘もある。しかし、史料採訪の自由にも恵まれず、この厖大な著作を独力完成したのであり、俗書雑史の引用により多少の誤謬があるのもやむを得ない。したがって、その困難な境遇に於てできる限り、史実を正確に伝えようとした努力は認めなければならない。

彼は史実の不明確なものに対しては、特に注記し最後に、「姑書而竢来者之校訂又は猶俟後考定而已」と記しており、史家としての態度を見ることができる。

第二に『野史』は、単に史実の記述のみでなく、これに道義的批判も加えている。

第三に本紀と列伝を比較するのに、本紀は分量が少ないとの批評もある。

第四に著者は、徳川氏を憚り、且つ徳川氏に左袒しているとも言われている。このことは、近世の学者に共通する事実であり、忠彦のみを深く責めるべきではない。他面に於ては尊王倒幕・王政復古のために活躍している。

(3) 『野史』編さんの苦労

忠彦は江戸に出向いて、上野の寛永寺の学寮を支配する下寺町生霊源院に入って寺侍となり、学寮より種々参考図書を借用して勉強し、『野史』編さんに従事した。

後一〇数年を経て天保五年（一八三四）、有栖川宮の家来となった。宮家からは甚大な信頼を得て、『野史』編さん並びに木活を利用して印刷を始め、有栖川宮の御沙汰を受け鷹司関白通政の手を経て、時の仁孝天皇に御覧いただくことができた。こうして、忠彦の素志が貫徹されたことは、彼にとっては無上の光栄であり、感激の至りであった。

甥の生田森衛にあてた書状には、「天覧候と申事、冥加之至り御悦給うべく候」と述べ、その喜悦の模様が記されている。

嘉永元年（一八四八）頃から、『野史』定稿の浄書が始められ、連日早朝から夜中の二時頃まで精励され、定稿本紀二一巻、列伝二七〇巻、併せて二九一巻を完成させ、更にこれを一〇〇冊に分冊製本した。しかし、折りからの安政の大獄に連座することとなり、公刊は頓挫することになる。

妹つね宛の書状にも「何より有がたき事は、某町奉行所へ呼び出され、江戸へ参ると申事、若宮様御聞遊され、西へ向い御なみだを御ながし遊され候由承りありがたき事かぎりなくよろこび候事に御座候。」とあり、忠彦が如何に有栖川熾仁親王の御信任を得ていたかが分かる。

この『大日本野史』及び『諸家系譜』等を伏見奉行林肥後守に取り上げられた時、徳山殉難七士の一人児玉次郎彦は、有栖川宮熾仁親王の命を奉じて林邸に往来し、弁論誠意を尽くして奉行所の者たちを説得し、その草稿を取り返すことができた。次郎彦二二歳の時であり、翌二三歳の若さで元治元年（一八六四）八月一二日朝、俗論派のため自宅で暗殺された。『野史』が現存している陰に、彼の憤然として決起救援のあったことを忘れてはならない。

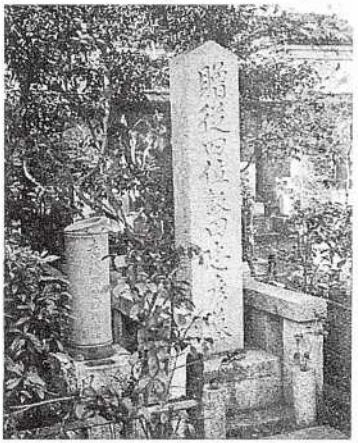
忠彦は、奉行所の訊問に遇う毎に、議論厳正、意気少しも衰えず、伏見奉行所最寄りの宿屋に宿預かりとなったが、憤満の余り、萬延元年（一八六〇）五月二二日暮六時頃、脇差をもって自ら喉を突いて自殺を企て、同二七日、そのため遂に卒去。時に歳六三であった。

遺骸は誠に丁重に取り扱われ、京都市河原町二条の龍源寺（現在は、京都市右京区太泰（うずまさ）中山町一〇―二に移転）墓地に内葬された。法名を志信院黙叟理現居士という。

後、忠彦の功績は認められ、明治二四年（一八九一）従四位に叙せられ、翌年靖国神社に祀られている。

また、徳山の後学の金子正道等の尽力により、忠彦の墓の側に「贈従四位飯田忠彦先生墓所」の石塔を建て、忠彦の我史学界における絶大なる功績を称え、昭

和七年孟春、同郷後学金子正道の碑文を刻して参拝者への案内の便を図られている。


飯田忠彦墓

伯夷叔斉や顔淵が一生不遇であって、餓死し或は窮死したものの、幸いに孔子の賞賛を得てその名が伝わるように、師の徳に観感し、後学金子正道の師の顕彰への努力も、史学探究が織りなす美談として残るであろう。

(4) 飯田忠彦顕彰碑と生誕地碑

○ 顕彰碑 (徳山市立動物園内)

贈従四位飯田先生旌功之碑

従四位子爵毛利元秀篆額

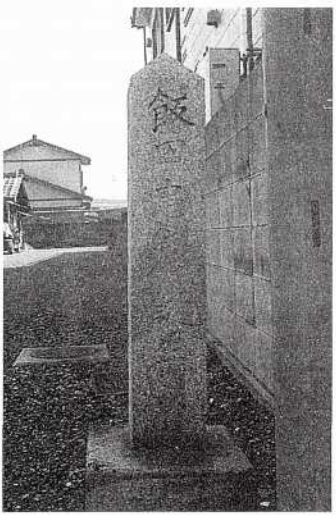
先生諱忠彦寛政十一年己未十二月生于徳山藩生田氏家出継飯田氏仕于有栖川宮為人聡明夙唱勤王常志修史独力編野史二百九十一巻未嘗借人幇助拮据三十八年如一日其他著書数部嘗為幕府所捕繋獄一百日尋有桜田之変幕府又疑其為党類史来将捕憤怒之余割腹而死如其詳伝戴野史首巻 故不復贅同志者胥謀建碑嘱余以銘銘曰 展也先生修史是求三十八年不改厥轅咨嗟偉哉勤王之猷殺身成仁忠義所鳩為世模者捨先生疇

大正二年九月

従七位大野太衛撰

従七位水木要輔書

○ 生誕地碑 (徳山市二番町浅見医院の北角)


飯田忠彦生誕地碑

五、おわりに

幕末を語る上で「尊王」「攘夷」の二つの思想を外すことはできない。この中で尊王思想の源流の一つと言われる『大日本史』は、当時の日本の歴史をどういう観点から見るのが一番妥当であるかを明示してくれたとも言える。また、公武合体論を骨抜きにし、断固として倒幕すべしとの方針に変わっていく。そして、最終的には王政復古の国民的精神統一論を徳川慶喜が決意したことにより、維新回天の新しい歴史を展開することとなったと言える。

このように、『大日本史・野史』がその根底にあったことを再考すると共に思い出されるのが、『弘道館記』の中の「忠孝二无(な)く、文武岐れず、学問事業その効を殊にせず」「以て国家無窮の恩に報いなば」と向うべき目標を明示している点に気づくことであろう。

参考文献

大日本史概説　平泉　澄
彰考館と教育　荷見守文
防長文化史雑考　小川五郎
贈従四位飯田忠彦伝　武田勝蔵
徳山雑吟　毛利元次
飯田忠彦書翰　徳山市立図書館叢書